

COPMニュース第27号

(過去のニュースは<http://www.npota.com/>精神科作業療法の中にあります)

発行日：2015.2.17

発行者：吉川ひろみ

県立広島大学保健福祉学部〒723-0053 三原市学園町1-1

TEL 0848-60-1236

FAX 0848-60-1134

E-mail yosikawa@pu-hiroshima.ac.jp

2014年は、COPM完成から25年目で、専用ウェブサイトも創設されました。

<http://www.thecopm.ca/>

現在36言語に翻訳されていて、いくつかの言語の翻訳は、このサイトから購入できます。COPM第5版の日本語訳は先週カナダに送ったので、そのうちに載るでしょう。



マニュアルと評価表で60ドルと、今までより高くなります。日本で出版された「COPMカナダ作業遂行測定」(大学教育出版)は、学生の授業用に出版されたため、評価表はマニュアルの付録となっていました。これからは評価表も購入して使えます。電子版もあるので便利です。これで、実践家が国際的な評価法としてCOPMを活用していく準備が整ったといえるでしょう。

COPMニュース26号で、「作業遂行の問題とは、その人がしたい、する必要がある、することを期待されていることであり、できない、していない、やり方に満足していないことではない」と書きましたが、間違いでした。正しくは、「作業遂行の問題とは、その人がしたい、する必要がある、することを期待されているけれども、できな

い、していない、やり方に満足していないこと」でした。「問題」という言葉が、「できない、していない、満足していない」などの否定語を使わないよう教えていたので、誤訳をしてしまったのだと思います。

去年の6月に「COPM・AMPS実践ガイド」(医学書院)が出版されました。事例がたくさん載っています。

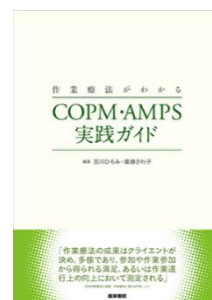
急性期病棟の事例では入院12日間で8回、訪問の事例は3例あり、3か月間に6～12回作業療法を行いました。開始時と終了時で、COPMの結果は、遂行スコア3点以上、満足スコア4点以上の向上があったと記載されています。

大橋秀行さんと村田和香さんが素晴らしい書評を書いてくださいました。

<http://www.igaku-shoin.co.jp/bookDetail.do?book=86227>

大橋さんの言葉「理念と手段は車の両輪となって、現状を変えていく。単にCOPMやAMPSを実施さえすればいいわけでもないし、理念だけ唱えても具体的な手法を展開しないままでは進まない」は、本当にその通りだと思います。「クライアント中心の遂行文脈」、「doing→being→becoming」、「人と環境と作業の関係」を理解しないと、ヘンなことになります。

「クライアント中心」ならば、トイレ動作訓練ばかりすることにはならないという話は以前も書きました。私の母が転倒して骨折後は、ベッド上紙おむつで排泄自立でした。1日2回の訪問介護で私は仕事を続け



ることができました。「作業を聞き出すにはどうしたらよいか」と質問する作業療法士は、自分のdoingに関心があっても、クライアントのdoingには無関心のように見えます。「認知症の人にはCOPMができない」と質問する作業療法士は、クライアントのbeingに執着しているのです。「クライアントが作業のことを言わない」という作業療法士は、作業が見えない環境でCOPMをしていることが多いようです。人と環境と作業が常に影響し合っていることを忘れ、人だけに焦点を当て、自分の職務遂行のためにクライアントから情報を引き出そうとしているのです。

村田さんの言葉「作業療法は実学である。実学とは・・・事象の真の姿を理解し、それに基づいて自ら判断することが必要・・・専門家による介入が成功したかどうかを決めるのは、その介入を必要としたクライアントである」に賛成です。人々の経験の中に学ぶべきことがあるのです。クライアントの経験も、作業療法士の経験も貴重です。日常の何気ない行動、その時の思い、その後の展開の中に、私たちがこれからよりよ

く生きるための知恵が含まれていると考えることは、doingを丁寧に見つめることにつながります。

去年の9月にティーチング・ポートフォリオを作成し、12月末から1月にかけてアカデミック・ポートフォリオを作成しました。自分が何をしているか（してきたか）、どのようにしているか、なぜそのようにしているか、と考えを進めていくと、自分の理念が見えてきます。まさにdoingからbeingを知ることになりました。そして将来何を目指すかを考えました。下の図は、私のアカデミック・ポートフォリオの全体像です。雪の下で美味しくなる白菜をイメージしました。

今後は意識的に「作業レンズの普及」に取り組んで行こうと思います。頭が悪い、体が弱い、気が小さいと嘆くよりも、血湧き肉躍る作業を通して、人も社会も好ましい状態になっていくように、その気になって考えて、いろいろやってみようと思っています。

人々の経験を語って演じるプレイバックシアターもdoingを見つめます。

